

研 修 金 子 保 利 議 員

研修: 第54回「都市問題」公開講座 関東大震災100年ーひとびとは何を受け継いできたのかー

日時: 2023年7月22日(土)

場所: 日本プレスセンター10階ホール 東京都千代田区内幸町2-2-1

区間	交通手段		鉄道賃		特急急行	飛行機	その他	計
			キロ	金額				
佐野駅～霞ヶ関駅	鉄道	往復	183.4	2,360	2,500			4,860
								0
								0
								0
								0
								0
								0
								0
								0
計				2,360	2,500	0	0	4,860

宿泊料@16,500×0泊 0 円

交通費 4,860 円

(うち航空運賃 0 円)

計 4,860 円

上記の金額は、佐野市職員等の旅費に関する条例及び佐野市職員等の旅費支給規則により算出した金額である。

議事課庶務係長 岩上 裕

第54回「都市問題」公開講座

関東大震災100年一ひとびとは何を受け継いできたのか

金子 保利

1. 研修日時 : 令和5年7月22日(土) 午後1時00分～午後4時00分
2. 研修会場 : 日本プレスセンター10F
3. 主 催 : (公財)後藤・安田東京都市研究所
4. 基調講演
 - *海老原 義 也 (鍼灸師・海老原商店を活かす会代表)
 - *小 林 正 泰 (共立女子大学家政学部児童学科准教授)
 - *中 島 直 人 (東京大学・大学院工学系研究科都市工学専攻准教授)
 - *小泉 秀樹(司会)(東京大学・大学院工学系研究科都市工学専攻教授)

開催趣旨

関東大震災からの復興では、土地区画整理による燃えにくい街区形成や耐火建築化の促進など災害に強いまちづくりが行われた。発災から100年が過ぎ、復興期に建設され建物の多くが取り壊され。震災の記憶は人々の脳裏から薄れてしまっている。とはいえ、地域を虫の目で見てみると、復興小学校と小公園の組み合わせが残っていたり、復興理念や防災意識などのソフトが継承さるのではないだろうか。震災を受け100年たった東京において、地域の住まう人々が関東大震災の被災と復興から何を受け継いできたのか考察する。



*海老原 義 也 氏

海老原商店は、明治20年古着屋として創業。爾来、大正、昭和、平成、令和と歴史を刻み義也氏で5代目とのこと。

明治から関東大震災までは古着屋を営み、震災で店舗焼失したためバラックで既製服屋を始めた。そして、東京大空襲で建物の一部が燃えたが隣近所が焼失したにも関わらず奇跡的に残った。戦後、生地問屋を始めた。昭和60年には、隣家の黒田家が放火され、海老原商店は、建物の一部が燃えたが家の中は、水浸りになった。平成3年には、隣家の工事中のクレーンが二階を直撃され崩壊した。このように海老原商店は、様々な歴史をたどり平成15年に「景観まちづくり重要物件」に指定された。

たびたびの災難にめげず、伝統工法(木と土とく草)で平成29年海老原商店復活した。5代にわたり海老原商店とともに生きてきましたが、人が成長するのは、苦難を乗り越えられたことの原点は、店舗を中心に家族があるように街の中心である学校があり、教育を受けられたことであると述懐しておりました。

* 小 林 正 泰 氏

関東大震災後の様々な都市問題が顕著になってきた。人口急増、環境悪化、都市災害、大衆社会化などである。

変動する社会構造に対して既存の都市構造が追いつかず、様々な問題が発生した。その問題にどう対応するかという課題が高まった。

復興小学校の歴史的価値を考えた場合、新教育思想の導入。地域社会とのつながり、都市問題への対応など歴史的建築物として理解・評価し地域の歴史遺産を多面的に読み解き価値あるものとしなければならない。そして、多くの人から受け継いだものや100年使ったものは先人が遺したものとして後世に伝えることが肝要である。



中 島 直 人 氏

* 帝都復興ヘリテージの発見と変容と再考

歴史、伝統、建造物、物品など、その国や社会が長年にわたって持ち続け、その国らしさの重要な一部とみなされてきたもの。

震災復興期の建築は、意外なほど戦火をかいくぐって生き延びたにも関わらず、東京オリンピックや高度経済成長期や経済発展、内需拡大の名のもとに跡形もなくその歴史を葬り去った。

これからの社会は、人々が心のよりどころになる良いものは後世に遺すことを第一義に捉え活動することが肝要であります。そして、後世の人々に誇れる歴史づくりをすることである。

所感

未曾有の関東大震災から何を受け継いできたのでしょうか。経済は世界に誇れる経済大国になりましたが、私たちは人と人との心と心の触れ合う社会を置き忘れてしまった感があります。

震災前は、昔からの行事や祭りなどを地域の老若男女が助け合い、励ましあって、先人が残された有形無形の文化遺産を継承してきました。今では、地域の住民同士が触れ合う機会が殆ど無くなってしまいました。そして、現代では、信じられない事件や事故が毎日のように起きております。

これからは、地域で「おはよう、こんにちは」と言えるような行事を復活することが安心安全なまちづくりや地域を明るくする唯一の手段であると思います。